

『図書館史』における 「本間一夫と日本盲人図書館」の史実を探る

History of The Japan Braille Library Founded by Kazuo HONMA
— Roles of books on Library History —

西 脇 智 子

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

本研究の目的は『図書館史』における「本間一夫と日本盲人図書館」の史実を探ることである。29冊の文献調査の結果、7冊の書籍に記載のあることが判明した。また文献調査の結果、日本図書館協会からの依頼原稿を「図書館雑誌」（昭和16年10月）に日本盲人図書館経営者の肩書で「『日本盲人図書館』に就いて」と題する原稿を寄せていたことが判明した。日本盲人図書館創立後の早い時期に日本図書館協会が本間一夫と日本盲人図書館の存在を把握していたことが推察された。

キーワード： 本間一夫 日本盲人図書館 日本点字図書館 図書館史 読書提供

Key Words : Kazuo HONMA, The Japan Braille Library 1940-1948, The Japan Braille Library, The History of Library, The Offering of Good Book-Reading Environment

1. はじめに

本間一夫は、その生涯を点字図書館事業に捧げ、視覚障害者への読書提供の大切さを世の中に訴え続けてきた。1940（昭和15）年11月10日、本間一夫（1915-2003）は、東京市豊島区雑司ヶ谷2丁目426番地の二階建ての借家に自らが名付けた「日本盲人図書館」の看板を掲げ、点字図書館を開設した。本間自身の蔵書と購入書を合わせた700冊の蔵書をもって、読書と単独での外出が不自由な視覚障害者を対象に郵送による館外貸出事業を創めた。現在の社会福祉法人日本点字図書館の創立である（図1）。



図1 日本盲人図書館の創立
（豊島区雑司ヶ谷の借家玄関前に立つ本間一夫）
出典：日本点字図書館所蔵

日本盲人図書館は、翌年1941年3月7日、新築された本間宅のある淀橋区諏訪町（現在の新宿区高田馬場）に移転した。社会教育家・後藤静香が提唱した点訳奉仕運動により、点訳奉仕者が作ってくれた点字書も増え、自宅兼図書館は手狭となっていく。

1941（昭和16）年12月8日、わが国は太平洋戦争に突入し、戦局が日に追って不利となる時世。第一線で戦傷を受けた失明軍人からの利用申し込みも相次いだ。点訳奉仕運動の発展と図書館建物の建設が事業の飛躍のために求められた。1943（昭和18）3月9日付の朝日新聞は、大日本点訳奉仕団（団長・後藤静香）の誕生と活動を5段抜きの大記事「盲人の点字図書館生る、戦傷勇士に希望の光」で報道した。次いで3月20日には毎日新聞が「高き文化の点字本」という見出しで、井上英会話スクール校長井上当蔵夫妻の発起で失明兵士に点字本をおくる「点字奉公会」が結成されたことを報じたこともあり、点訳講習会には多くの奉仕者が集まった。同年7月18日、わが国初の点字図書館が竣工した。本間は点字図書館建設をめざして、最初の経験となる資金集めに奔走した。各方面に理解協力を募った結果、点字図書館棟は落成し、事業はいよいよ軌道に乗るかにみえた。ところが戦局は日を追って不利になり、1944（昭和19）年に入ると、本間はかけがえのない点字書を戦禍から守るため、安全な場所を求め、点字書2300冊、書棚5本、家財道具一切を2台のトラックに乗せて茨城県結城郡総上村へ疎開させた。翌1945（昭和20）年4月初めには北海道増毛の本間の実家へと再疎開を執行した。日本盲人図書館の貸出事業は、1948（昭和23）年3月に東京復帰が実現するまでの4年間にわたり、疎開先の茨城と増毛から継続されたのである。日本初の点字図書館は、1945年5月26日の東京空襲で全焼した。この焼け跡に15坪の住宅を建ててもらい、本間は「日本点字図書館」と名称を改めて、点字図書館事業を再開した。

これらの日本盲人図書館の史実は、『日本盲人図書館開設一周年』（本間1941）、「日本における図書館の障害者サービス年表」（渡辺1982）、『盲人福祉事業の歴史』（谷合1998）、『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー』（日本ライトハウス21世紀研究会編2002）、また本間の個人史を著した『指と耳で読む』（本間1980）、『点字あればこそ』（本間1997）、『本間一夫 この人、その時代』（古澤1997）、『わが人生「日本点字図書館」』（本間2001）、「本間一夫と日本点字図書館」（谷合1994）に詳細な記述が認められる。

2007年、日本盲人図書館の史実を裏付ける蔵書の一部が北海道増毛の本間家の蔵で発見された。筆者を含めた日本点字図書館本間記念室委員会では、2012年9月21日、60余年の時空を超えて帰還した「日本盲人図書館」の蔵書調査を現在進めているところである（西脇2013）。

今夏、東京空襲を逃れ疎開した日比谷図書館の史実『疎開した40万冊の図書』（金高2013）に関心が寄せられた。同時代に活動した「本間一夫と日本盲人図書館」は、1940（昭和15）年11月10日の創立から終戦後の1948（昭和23）年3月に再開するに至る史実は、『図書館史』にどのように記載されているのか。筆者はその状況を把握するため、実践女子短期大学図書館及び実践女子大学図書館が所蔵する『図書館史』を収集し文献調査を開始した。本研究の目的は、『図書館史』における「日本盲人図書館創立」や「本間一夫と日本盲人図書館」に関連する史実を探り、記載の状況を明らかにすることにある。

研究の結果と考察

1. 『図書館史』における文献調査の結果

筆者は2013年7月より実践女子短期大学図書館及び実践女子大学図書館が所蔵する29冊の『図書館史』を対象に、「日本盲人図書館の創立」及び「本間一夫と日本盲人図書館」に関連する史実の記載があるか否かを探るための文献調査を実施した。調査の結果、収集した『図書館史』の年表及び本文に記載のあった書籍と記載のなかった書籍を把握することができた。調査結果を以下に報告する。

1-1. 『図書館史』に「本間一夫と日本盲人図書館」の史実の記載が認められた7冊の書籍を表1に整理した。

表1 『図書館史』における「本間一夫と日本盲人図書館」の史実の記載のある書籍一覧

刊行年	著者名：	書名、出版社名
1955年 (昭和30)	竹林熊彦・小野則秋・ 宮田平三	(1)『特殊図書館』蘭書房
	竹林熊彦の論述として、①「日本点字図書館」、②「ライトハウス中央点字図書館」についての詳細な記述がある。	
1966年 (昭和41)	草野正名	(2)『図書館の歴史：日本および西洋の図書と図書館史』、学芸図書株式会社
	①1940(昭和15)年11月「日本点字図書館設立」 ②1793(寛政5)年「塙保己一、和学講談所を開き、文庫設立。」	
1977年 (昭和52)	佐野捨一編	(3)『世界図書館年表：古代—1970年』、岡山理科大学
	①1940年 日本盲人図書館開館(東京)。(注：全日本の盲人を対象とした我が国唯一の点字図書館。)②1857年 点字図書の備付(英国)、1868年 点字図書の備付(米国)・塙保己一の和学講談所がわが国最初の国学館となる。 1901年 点字図書部(米国)、1921年 点字図書部(米国)、1904年 点字図書郵送料金免除(米国)	
1980年 (昭和55)	石見 尚	(4)『図書館の時代』、論創社
	①1940年「本間一夫、日本点字図書館つくる」 ②1928年「岩橋武夫、点字図書貸出し事業始める」 1929年「鹿児島県図書館に盲人閲覧室できる」	
2000年 (平成12)	馬場萬夫・飯澤文夫・ 古川絹子	(5)『東京都の図書館：23区編』
	①新宿区 日本点字図書館(沿革、蔵書、刊行物等、詳細な記載がある)	
2009年 (平成21)		(6)『世界図書館年表：古代—1970年』、日本図書センター 底本：佐野捨一編『世界図書館年表：古代—1970年』、岡山理科大学
	①1940年 日本盲人図書館開館(東京)。(注：全日本の盲人を対象とした我が国唯一の点字図書館。)②1857年 点字図書の備付(英国)、1868年 点字図書の備付(米国)・塙保己一の和学講談所がわが国最初の国学館となる。1901年 点字図書部(米国)、1921年 点字図書部(米国)、1904年 点字図書郵送料金免除(米国)	
2012年 (平成24)	佃一可編著	(7)『図書・図書館史』4月25日発行
	①1940年には、日本盲人図書館が創立されている ②「1920年代、貧困が社会問題化し、慈善事業という概念は社会事業という概念に代わる。」「横浜の社会事業図書館が1924年10月23日、公開を開始」等、専門図書館に関連する社会事業活動に着目した記載がある。	

表の上段は、著者名および書名・出版社名を転記した。書名には通し番号をふった。

表の下段は、記載内容について、①本間一夫・日本盲人図書館・日本点字図書館に関連する記載のあるもの、②その他、盲人福祉事業・視覚障害者に関連する記載のあるものを記した(著者作表)。

(1) 「本間一夫と日本盲人図書館」について最も詳細な記述のあった書籍は、竹林熊彦の自著『特殊図書館』である。竹林は「第5編 盲人点字図書館」を論述している。とくに「日本点字図書館」については、「1. 沿革と現状」「2. 本間一夫という人」「3. 希望はかがやく」と題して詳細に論述している。「本間一夫と日本盲人図書館の創設」という史実は、図書館史の1つのできごととして、索引や年表、また本文に一文を記載する書籍が多い中で、竹林は3度も日本点字図書館に足を運んで執筆に至っていることは特質すべきことである(竹林1955:227-232)。

(2) 草野の自著『図書館の歴史』の巻末「日本・外国図書館史年表」には、1940年の「日本」の出来事として「11月 日本点字図書館設立」の一文を記載しているが、本文には一切記述はなかった。なお、同書の巻末年表には「塙保己一の和学講談所(1793年)」の一文が掲載されている(草野1966:230)。

(3) 1977年刊行の『世界図書館年表』の344頁には、「1940年 日本盲人図書館開館(東京)。(注:全日本の盲人を対象とした我が国唯一の点字図書館。)」の記述がある。底本の著者である佐野捨一は、日本図書館協会「図書館雑誌」37巻76頁を参考に記載している(注²⁾)。また、1857年 点字図書館の備付(英国)「リバプールの公共図書館に文館を設置。また、点字図書館を備え付けた。(注:いずれも無料 公共図書館においては最初である。)」、1868年 点字図書館の備付(米国)「ボストン公共図書館は点字図書8冊の寄贈を受けた(注:この寄贈賀盲人に対する啓発の発端となることを望んだ。)」、1901年 点字図書部(米国)「フィラデルフィア聖書協会の図書館はフィラデルフィア無料公共図書館の点字図書部となる。」、1921年 点字図書部(米国)「フェアチャイルドが1899年、ニューヨークに点字図書館を設立」、1904年 点字図書郵送料金免除(米国)「米国政府は点字図書の郵送料を免除。」との記述もある。

イギリスの公共図書館については、Thomas and Edith Kellyの記述がある。「盲人に対する図書の提供はリバプールの貸出図書館で早くも1857年に始められた。その10年前に、ブライトンのウィリアム・ムーン博士(彼自身盲人であった)は、聖書およびその他の著作を彼の考案した特別の活字で印刷し配布するための協会を設立した。これは浮彫りになった文字で、ふつうのアルファベットの簡略形に基づくものであった。ムーン・システムは一時期広く使われ、1850年代および60年代に盲人に対するサービスを提供していたリバプールおよびその他十指にあまる公共図書館は、ムーン活字により印刷した図書の小さなコレクションを有していた。しかしながら、同じ世紀の後になって、英国および海外盲人協会は、注意深い研究の後に、現在良く知られている、フランス人ルイ・ブラユにより1834年に考案された浮彫りの点に基づく、ブラユ・システムを公式に支持することに決めた。これによって公共図書館もまたブラユによる本を提供することが必要になり、マンチェスター図書館は、ある時期には、ブラユ点字本を作るために数人の盲人点字者を雇っていた。この種のサービスにまつわる困難は、製作費が高いためと必要な書架のスペースが大きいため、第公共図書館しか盲人の利用者のニーズを満たすに十分な大規模かつ多様な蔵書を維持する余裕がなかったということである。それゆえ、最終的には、1882年に設立されたボランティアな団体である全国盲人図書館を通して、サービスを集中化するのが最も経済的であることがわかった。1918年以降、この組織は、以前にマンチェスター公共図書館

が保有していた蔵書を引きついで北英支部をマンチェスターに持つことになった。郵便局との取決めによって、全国盲人図書館は、直接盲人の読者に対しても、また地方の盲人協会に対しても、いずれも郵便料が無料でサービスを提供することができた。カーネギー財団の寛大な援助によって、全国盲人図書館のサービスは両大戦間に急速に発展し、1925年までには10万巻以上におよびコレクションが利用できるようになった。その2年後に、ケニヨン委員会の『イングランドとウェールズにおける公共図書館に関するレポート』は、41の公共図書館がいぜんとして盲人のための特別コレクションを持っていたことに注目し、将来は「いかなる新しい計画もおそらくは全国盲人図書館への加入という形が最善のものとなろう」と勧告した(Thomas and Edith Kelly 1983: 133-134)。

(4) 石見の自著『図書館の時代』には、索引に「点字図書館 332、333頁」「本間一夫の日本点字図書館 333頁」という項目があり、年表の日本の出来事として「1940年 本間一夫、日本点字図書館つくる」「1928年 岩橋武夫、点字図書貸出し事業始める」「1929年 鹿児島県図書館に盲人閲覧室できる」という3件のできごとを記載している。また本文332～333頁には、「第6章 日本における図書館の現代化」の「4. 点字図書館」に記述があり、「民間独立の盲人図書館は本間一夫氏によって、昭和15年に、東京都新宿区高田馬場に設立された。これが日本点字図書館である。(略)」と記述している^(注1)。石見はライトハウスについても詳細な記述をしている。332頁には「人間性の尊重への図書館の努力の一分野に、失明者のための点字図書館がある。それは失明者が、近代的職業人として独立できる訓練方法を開発してきた、先駆者の献身的努力の結果である。その先駆者の一人は、日本ライトハウスの岩橋武夫氏(1899-1954)である」として、岩橋の詳細な経歴とともに、エジンバラの盲人図書館や岩橋が大正1年に出版した点字図書について述べた。また、333頁には「公立のものとしては、昭和4年に、鹿児島県立図書館が盲人閲覧室をひらいた」との記載もある。

(5) 馬場萬夫らは『東京都の図書館:23区編』において、新宿区日本点字図書館についての沿革、蔵書、刊行物等を詳細に記載している(馬場・飯澤・古川2000: 94-95)。

(7) 佃一可編著の『図書・図書館史』には、「IV編 近・現代社会と図書館」「12章 日本の近代化と図書館」の「3. 図書館の振興と苦難」の「(1) 都市化の進展と専門図書館の出現」の最後の行に「1940年には、日本盲人図書館が創立されている。」という短い一文だけが記されている(佃2012: 163)。また、専門図書館として「1920年代、貧困が社会問題化し、慈善事業という概念は社会事業という概念に代わる。横浜では、社会事業図書館が1924年10月23日、震災でこれまでに収集した資料が烏有(とう)に帰しながらも公開を開始している。また、大阪では、実業家・大原孫三郎が社会事業に関する研究機関として、大原社会問題研究所を1919年2月に設立。社会問題・経済学の研究者に図書閲覧の便宜を図るべく、1924年4月21日、図書閲覧室が開設された。同研究所は1936年東京に移転し、現在は法政大学が運営に携わっている。」(略)、「そのほか、今日に続く専門図書館の先駆として1897年1月20日、東京銀行集会所内に開設された経済文庫が挙げられる。現在は銀行図書館に引き継がれている。また、1936年には、東京書籍株式会社付設の教科書図書館・東書文庫が公開開始。」等々について、詳細に記述している(佃2012:

162-163)。なお「(3) 戦時下の図書館」については、中田邦造と疎開した買い上げ書物に関する記述もある(佃 2012: 165-166)。

1-2. 『図書館史』に「本間一夫と日本盲人図書館」の史実の記載がなかった22冊の書籍を表2に整理した。

表2 『図書館史』における「本間一夫と日本盲人図書館」の史実の記載のなかった書籍の出典一覧

刊行年	著者名:	書名、出版社名
1952年 (昭和27)	小野則秋	(1)『日本図書館史』、蘭書房
1972年 (昭和47)	草野正名	(2)『増訂 図書館の歴史：日本および各国の図書と図書館史』、 学術図書株式会社
	石井敦	(3)『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会
1973年 (昭和48)	石井敦・前川恒雄	(4)『図書館の発見：市民の新しい権利』(NHKブックス194)、 日本放送出版協会
1977年 (昭和52)	清水正三	(5)『戦争と図書館』、昭和史の発掘
	角家文雄	(6)『日本近代図書館史』、学陽書房
	草野正名	(7)『三訂 図書館の歴史：日本および各国の図書と図書館史』(再 版)、学芸図書株式会社
1978年 (昭和53)	石井敦篇	(8)『図書館史・近代日本篇』、白石書店
	小野泰博	(9)『図書及び図書館史』、雄山閣出版株式会社
1980年 (昭和55)	ヨリス・フォルシュティウス、 ジークフリート・ヨースト著 (藤野幸雄訳)	(10)『図書館史要説』(新訂増補第7版)、日外アソシエーツ株式会社
1986年 (昭和61)	佐藤正孝	(11)『図書館発達史』、みずうみ書房
	森 耕一	(12)『公立図書館の歴史と現在』、日本図書館協会
1989年 (平成1)	石井敦	(13)『図書館史』、教育史料出版会
1993年 (平成5)	財団法人日本図書館協会編	(14) 近代日本図書館の歩み 本篇：日本図書館協会創立百年記念
1994年 (平成6)	寺田光孝・藤野幸雄 著	(15)『図書館の歴史』、紀伊国屋書店
	日本図書館協会編	(16)『近代日本図書館の歩み 年表』、日本図書館協会
1998年 (平成10)	佐藤政孝	(17)『東京の近代図書館史』、新風舎
	小川徹・山口源次郎編	(18)『図書館史：近代日本篇』、教育資料出版会
2000年 (平成12)	小黒浩司編著	(19)『図書及び図書館史』日本図書館協会
2007年 (平成19)	岩猿敏生	(20)『日本図書館史概説』日外アソシエーツ株式会社
2012年 (平成24)	藤野幸雄 監修 田村盛一・天野敬太郎編集	(21)『日本図書館史年表：弥生時代～1959年』金沢文圃閣
2013年 (平成25)	小黒浩司編著	(22)『図書・図書館史』日本図書館協会

書名には、通し番号を付けた(著者作表)。

(1) 小野則秋『日本図書館史』の「第9節 昭和前期の図書館」では、「昭和15年に東京において二千六百年の祝賀式が挙行され、図書館もまたこれを記念してその前後に開館されたものが多く、(略)」として、私立公共図書館の「滋賀県の近江兄弟社図書館」が紹介されている(小野1952:290頁)。また291頁～293頁の「太平洋戦争と図書館」では、292頁に「(略)、特に大学では慶応義塾大学図書館の戦災はその甚だしいものの1つで、太平洋戦争による図書館の被害は到底大正12年の関東震災の比ではなかった」と記している。

(3) 石井敦の自著『日本近代公共図書館史の研究』には、年表に記載が認められなかった。しかし、「1940年12月 近江兄弟社図書館」の記述がある。

(5) 清水正三の自著『戦争と図書館』には、244頁の関連年表に「昭和15年12月 近江兄弟社図書館設立」の記載があった。

(8) 石井敦篇(1978)『図書館史・近代日本篇』の168～175頁の日本公共図書館年表、草野正名の自著『三訂 図書館の歴史：日本および各国の図書と図書館史』、(9) 小野泰博(1978)『図書及び図書館史』、雄山閣出版株式会社には、史実記載が認められなかった。

(10) 1980年刊行のヨリス・フォルシュティウス、ジークフリート・ヨーストの自著『図書館史要説』(藤野幸雄訳)には、日本に関する記述が認められなかった。しかし、「第14章 1945年以降の図書館史」の「I ヨーロッパ」「1 ドイツ連邦共和国」における「教養全般にわたる公共図書館」では、179頁に「(略) もっとも大きい盲人図書館はハンブルク(65000冊の点字資料)およびマールブルク(52000冊の点字資料)に見出せる」の記述がある。また「2 イギリス」の項では、186頁に「点字資料の中央施設は、1882年ロンドンに設立された国立盲人図書館で、38万冊の蔵書を所有している」との記述が認められた。

(12) 佐藤正孝の自著『図書館発達史』の273頁には、「さらに、昭和4年になると、市内在住の盲人の読書要求にこたえるために、点字文庫を開設し、視覚障害者の研究と慰安のために必要な点字図書の無料貸出しを開始している。この点字図書によるサービスは、その後も一貫して実施され、多くの盲人読者たちに喜ばれた。名古屋市立図書館は点字図書館サービスという点でも先駆的役割を果たした図書館であった。」として、271～273頁「名古屋市立図書館の活動」に、第2編 日本近代図書館史 第3章 近代図書館の充実期、3 大都市の図書館の発展の記述がある。また、戦時下の東京の図書館の様子も、第4章 戦時体制下における公共図書館、3 戦時体制と東京市立図書館の294～296頁に中田邦造と戦時特別買上げ図書、296～299頁に図書館の戦災について詳細な記述があった。

(13) 森 耕一の自著『公立図書館の歴史と現在』には、「I 公立図書館の歴史」の「公立図書館の発展とその課題：イギリスと日本との比較」、85～86頁「7. 図書館発展の原動力」に「公立図書館の歴史をふりかえてみると、百数十年の間に、いろいろの分野へ公共図書館サービスの領域が広がっていったことを知る。すでに、1857年にリヴァプール市立図書館が点字図書の貸出を行っている。それは、盲人図書館(National Library for the Blind)が創設されるよりも25年前の事である。」との記述があった。

(16) 寺田光孝・藤野幸雄(1994)『図書館の歴史』にも、史実記載は認められなかった。ただ

し「V-7 大正・昭和期の日本の図書館」には、182～188頁の震災と関連する記述が認められた。また185頁には、私立図書館の創設を紹介し、滋賀の近江兄弟社図書館が紹介されている。

(21) 藤野幸雄監修、田村盛一・天野敬太郎編の『日本図書館史年表：弥生時代～1959年』には、「日本図書館史並二関係事項年代記 IV」469頁の「2575 大正4年」の記述の中に「東京盲学校では大典記念として従来の図書室を拡張し、図書館を設立することとした。また東京盲人教育会でも10周年記念のために本年点字図書館を設けた。なお、盲人のために設備している所では新潟県立、鹿児島県立、名古屋市立の各図書館がある」との記述がある。

(23) 小黒浩司編著の『図書・図書館史』には、記載が認められない。しかし、105頁には「図書の疎開」について、日比谷図書館の記載が認められた。

2. 文献調査『図書館史』が導いた新たな史実

2-1. 「本間一夫と日本盲人図書館」の新事実の発見

『世界図書館年表』の底本の著者である佐野捨一は、日本図書館協会発行「図書館雑誌」の37巻76頁を参考に記載しているが、第37巻第2号76頁(昭和18年2月)のコラム「耳と目②」「日本盲人図書館：建築資金を募る」が正しい出典である。このコラムは、当時の日本盲人図書館の状況がよく読み取れる文章で、「日本盲人図書館のことは一昨年11月号の本誌で館長本間一夫氏によって紹介されたことがある。それが10万の盲同胞、その中には護国の聖戦に光を捧げた勇士たちをも含む、全日本の盲人たちを対象としたわが国唯一の点字図書館であることは、今改めて断るまでもない。」と明記されていることが判った。この「図書館雑誌」(昭和18年2月)の記述から、「図書館雑誌」1941(昭和16)年10月号の「図書館雑誌」には、本間が日本盲人図書館経営者の肩書で「『日本盲人図書館』に就いて」と題する原稿を寄せていたことが判明したのだ。

本間は、まず初めに点字と点字図書館の状況を説明しつつ、「最も良き点字書を多数蒐集保管し、全国の盲人に対して手軽に貸し出すと云った図書館施設の出現は、わが国盲人文化のため絶対必要となってきたのであります」と、点字図書館の必要性を明らかにしている。「盲人の名に於いて氏名、住所、性別、年齢、職業の五項目を付記し申し込むものに対しては直ちに図書貸出しを開始する方法をとりました。一方事業対象の盲人が全国に散在し、また市内に在住するも盲人は外出に不便等の理由から、図書は大部分郵便に依る館外貸出しであり、館内閲覧は極めて稀であります。前者、無料無保証貸出制度は本館が取れる空前の英断であり、校舎、図書の殆ど凡てが館外貸出であることは点字図書館が持つ一大特色であります。」とする日本盲人図書館の特色や、創立から1年経過して約700冊から約1,200冊に上った蔵書のこと、詳細な利用状況、「図書館目録」と「図書館ニュース」等の出版物の案内、「心の家」の協力を得て晴眼者に対する点字の普及運動をも事業の一部としていること、点訳を学んでいる人や点訳奉仕の労をとって寄蔵している附帯事業の活動状況等、判りやすく伝えている。結びでは、最後に忘れてならない事として「東亜共栄圏確立の聖戦に於いて、多数の勇士が御国のため掛替無き其の両眼を捧げられた事実であります。」(略)「因みに本館の経営費は目下、一切個人の負担であり、従って事業も極

めて小規模足らざるをえません。」と述べ、開設1周年を期して、初めて一般社会に対して協力を求めるために目下印刷等各方面の準備をしていることを附記している。

本間は、創立1周年に当たり、1941（昭和16）年11月10日付で発行する非売品の小冊子『日本盲人図書館開設1周年』の編集後記を10月27日付で記した。今般の文献調査の結果、本間は、1941（昭和16）年10月号の「図書館雑誌」に日本盲人図書館経営者の肩書で「『日本盲人図書館』に就いて」と題する原稿を寄せていたことが判明した。

さらに、日本点字図書館本間記念室に保管されている「本間ノート：昭和16年 図書館日誌」^(注3)に照合すると、新事実が浮かび上がってきた。この「図書館雑誌」に掲載された原稿は、日本図書館協会からの依頼原稿であることが判明したのである。日本図書館協会は、「本間一夫と日本盲人図書館」の存在を早い時期から認識していたことが推察できよう。この発見は、本調査における最大の研究成果である。

以下に、1941（昭和16）年9月10日に本間が点字で記した日誌を紹介する。

「岩橋先生に墨字パンフレットの原稿依頼の手紙を出した。一方いよいよ第一歩として僕の挨拶の原稿をまとめにかかる。この20日間に編集一切を完了の予定、且つ、意気込み。それから図書館協会から頼まれていた原稿「日本盲人図書館について」を、やっと書き上げて送った。墨字に直すのには齋藤千代さんも一苦労だったが、これでようやくほっとした。尚、同協会への加入手続きもとり、会費3円を送った。」

2-2. 滋賀県の近江兄弟社図書館という史実

本間一夫と日本盲人図書館創立に関連する記載が認められなかった書籍のなかで、滋賀県の近江兄弟社図書館の史実については記述した書籍が4冊も浮かび上がってきたことは特筆すべきであろう。

寺田光孝・藤野幸雄の『図書館の歴史』の「V-7 大正・昭和期の日本の図書館」185頁には、私立図書館の創設を紹介し、滋賀の近江兄弟社図書館が紹介されている。小野則秋『日本図書館史』の「第9節 昭和前期の図書館」では、290頁に「昭和15年に東京において二千六百年の祝賀式が挙行され、図書館もまたこれを記念してその前後に開館されたものが多く、(略)」として、私立公共図書館の「滋賀県の近江兄弟社図書館」が紹介されている。石井敦『日本近代公共図書館史の研究』の「1940年12月近江兄弟社図書館」、清水正三の自著『戦争と図書館』の244頁に、「昭和15年12月近江兄弟社図書館設立」の記載が関連年表に認められた。

本間一夫が日本盲人図書館を創立した昭和15年11月の翌月に、近江兄弟社図書館設立されていた。近江兄弟社図書館の設立に尽力したのは、盲人牧師の大橋五男であることが浮かび上がってきた（大橋1998、梅沢2009）。

おわりに

筆者は、実践女子短期大学図書館及び実践女子大学図書館が所蔵する『図書館史』29冊を収集し、「日本盲人図書館の創立」及び「本間一夫と日本盲人図書館」に関連する史実の記載がある

か否かを把握した結果、年表および本文に記載のあった『図書館史』の書籍が7冊も存在することが明らかとなった。また「本間一夫と日本盲人図書館」についての記載がなかった『図書館史』22冊が確認できた。

今般の資料調査における最大の発見は、本間一夫と日本盲人図書館の新事実の発見である。『図書館史』の導きにより、「図書館雑誌」(昭和18年2月)を発見し、この記述から「図書館雑誌」(昭和16年10月)の文献を収集することができた。本間が日本盲人図書館経営者の肩書で「『日本盲人図書館』に就いて」と題する原稿を寄せていたことが判明したのだ。さらに、この原稿が日本図書館協会からの依頼原稿であることも判明した。

今後も引き続き丁寧な文献調査を継続し、「本間一夫と日本盲人図書館」の史実を裏付ける諸資料や関連資料を収集整理して、墨字資料の充実を図っていきたい。

補記：「日本盲人図書館」の時代

日本盲人図書館の活動は、1940(昭和15)年～1948(昭和23)年の8年間である。

1940(昭和15)年11月10日、本間は自身が住んでいた豊島区雑司ヶ谷2-246番地の借家で日本盲人図書館を開館した。図書貸し出しの仕事は、本間とばあやが行ったが、墨字が必要な事務には、東京盲学校普通師範部の真船竜雄に夜だけ来てもらっている。若かった本間にとって事業の最も良き相談相手は、近くにおられた佐藤和興盲牧師であった。利用者に渡した番号を入れた借り出し券というカードの第1号は、「佐藤さんにさし上げてあったと記憶しています」と述べている(本間2001:106-107)。

本間が日本盲人図書館の8年間の活動を発展させることができたのは、点訳奉仕に尽力した奉仕者の活動にあらう。1940(昭和15)年10月13日、雨池信義は、本間に後藤静香を紹介している。後藤は見果てぬ夢を本間に架けたのか、自分の体験を通したアドバイスをを行った。後藤は「図書館の生命は新入図書ですが、あなたはそれをどうしてつくるつもりですか」と改まって本間に尋ねている。一般の図書館は、新規に書籍を購入していくが点字出版となると同じようにはいかない。「(本間) それで一番頭を痛めています。現在僅か700冊の手持ちのもので始めるのですから。しかし、結極は金を出して点訳をたのむ以外に方法はないと思っています」「(後藤) 私はあなたがどんなに金持ちか知りませんが、年々おびただしく出版される本ですよ。その方法は所詮蟻螂の斧ではありませんか」「(本間) ほんとうにそうかもしれません」「(後藤) 私は英国で世界一という盲人図書館を見ました。そのおびただしい点字書の大半が手書き写本だと聞いて愕いたのです。誰が書いたのかと聞きました。それは大部分貴婦人たちの奉仕であるというのです。本間さん、私は思うのですよ。日本人というのは素晴らしい民族だと信じています。そしてこのような高貴な事業を理解できる人間がたくさんいるはずだと、私は思うのです。私はあなたの図書館の外部の応援者として、このことを私の同志に訴えてみようと思います」「(本間) 先生、せっかくですが、われわれ盲人の家族も親戚も、点字を習ってくれないんですよ。いわんや、何の必要もない一般の方が、果して点字をおぼえてくれるものでしょうか」「(後藤) 何よりも前に、私が自分でやってみます。そして、私に出来たら、私の周囲の人々に呼びかけてみましょう」。

加藤善徳は、交わされた話をこのように綴った（加藤 1968：61）。創立の翌年 3 月 7 日、日本盲人図書館は、新築した本間宅（東京市淀橋区諏訪町 212 番地）に移転した。

表 3 本間一夫と日本盲人図書館の活動記録

年	日本盲人図書館史の抜粋	貸出事業のデータ
1940 年 (昭和15年)	11月10日 日本盲人図書館の創設 (東京都豊島区雑司ヶ谷 2 - 426 番地の借家)、 11月3日 第 1 回点訳者育成の講習会「心の家」 主宰(講師は後藤静香)。 ・月刊「図書館ニュース」創刊号発行 ・「点字蔵書目録」(点字版) 無料配布	書架 5 本 蔵書数 700 冊でスタート
1941 年 (昭和16年)	2月15日 初めての点訳奉仕書 完成 3月7日 東京都淀橋区諏訪町 212 番地(現在地)に本間宅を新築、移転。 4月4日 職員第 1 号齋藤千代 採用、6月13日 中外商業新報(現在の日経)紙上に事業内容が初めて報道される、 11月16日 創立 1 周年記念会開催、12月 第 1 回点訳奉仕者感謝会開催	この 1 年の開館日数 344 日、開館より 1 年で蔵書数 1300 冊、開館 1 年間の利用者数 700 名、郵送貸出数 7000
1942 年 (昭和17年)	1月 日本盲人図書館敬助会の発足(盲人読者による後援会)、 4月1日 大日本点訳奉仕団構成、7月30日「点字の葉」発行	2年で蔵書数 1700 冊
1943 年 (昭和18年)	4月9日 有楽町井上英会話スクールにて「点字奉公会」第 1 回講習会開催、7月18日 図書館新館落成 ・「日本盲人図書館便り」第 1 信発行	3年で蔵書数 2300 冊
1944 年 (昭和19年)	3月31日 貸出部茨城県結城郡総上村に疎開(この時の蔵書数 2300 冊)、4月「日本盲人図書館だより」第 2 信発行、7月30日「点訳通信」創刊号発行、8月「日本盲人図書館だより」第 3 信発行 ・10月30日現在 約 300 面の点字器が点訳者にわたる	4月～6月 点訳者述べ 21 名から 39 冊寄贈 6月 貸出冊数 1303 冊 11月 貸出には第 5 希望まで書いてもらう ・点字用紙が入手困難となり、点字出版が行き詰る。
1945 年 (昭和20年)	4月13日 貸出部は北海道増毛町の本間生家に再疎開(この時の点字書訳 3000 冊)、5月25日 戦災により図書館全焼、8月15日終戦	(この時の点字書訳 3000 冊)
1946 年 (昭和21年)	・北海道増毛町の本間の生家で貸出事業継続	この年の貸出冊数、2000 冊台
1947 年 (昭和22年)	・北海道増毛町の本間の生家で貸出事業継続	この年の蔵書 3027 冊利用者約 400 人貸出冊数 4821 冊
1948 年 (昭和23年)	1月30日 疎開先より上京し、焼け跡に本間宅を新築、同宅内に図書館の仮事務所開設 4月1日 日本点字図書館と改称 ・4月 点訳奉仕団が再発足 ・9月 点訳者養成の復活	

(著者作表)

謝辞

今般の『図書館史』の収集に当たりましては、実践女子短期大学図書館並びに実践女子大学図書館の皆様大変お世話になりました。昨年より「本間一夫と日本盲人図書館」調査にあたり、社会福祉法人日本点字図書館の理事長の田中徹二氏、館長の天野繁隆氏はじめ本間記念室委員会の皆様大変お世話になりました。特に墨字資料室「奥村文庫」の濱田幸子氏、前館長(現在は

参与)の小野俊己氏、同館評議員・静岡県立大学短期大学部准教授の立花明彦先生にご懇切なご指導を賜りました。ここに記して心より感謝の意を表します。

注

1. 「東京都新宿区高田馬場に設立された。これが日本点字図書館である。(略)」の記述であるが、昭和15年の創立時点の借家の住所は、東京市豊島区雑司ヶ谷である。
2. 『世界図書館年表』の底本の著者である佐野捨一は、日本図書館協会発行「図書館雑誌」の37巻76頁を参考に記載しているが、第37巻第2号76頁(昭和18年2月)のコラム「耳と目②「日本盲人図書館：建築資金を募る」が正しい出典である。
3. 日本点字図書館本間記念室に保管されている「本間ノート：昭和16年 図書館日誌」は、2010年に日本点字図書館内で発見された。原文は点字であることから、立花明彦が作成した漢字仮名交じり文の墨字資料を参照した。

引用・参考文献一覧

- 古澤敏雄 (1997) 『本間一夫 この人、その時代』 善本社
- 本間一夫 (1941 a) 『『日本盲人図書館』に就いて』 『図書館雑誌』 第35年第10号、722-723
- (1941 b) 『日本盲人図書館開設1周年』 (非売品)
- (1951) 「点字の世界：盲人にも文化を与えよ!!!」 『文藝春秋』 29 (2)
- (1980) 『指と耳で読む：日本点字図書館と私』 岩波書店
- (1997) 『点字あればこそ：出会いと感謝と』 善本社
- (1999) 『忘れ残りの通信集：点訳ボランティアの方々へ』 日本点字図書館 (非売品)
- (2001) 『わが人生「日本点字図書館」』 日本図書センター
- 本間一夫・緑川 亭 (1977) 「日本点字図書館：37年の歩み」 『世界』 (381)
- 本間一夫・岩橋明子・田中農夫男編 (1991) 『点字と朗読を学ぼう』 福村出版
- 金高謙二 (2013) 『疎開した40万冊の図書』 幻戯書房
- 加藤俊和 (2002) 「点字図書館の発展」 日本ライトハウス21世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー：自立と社会参加を目指した歩みと展望』 教育出版
- 加藤善徳 (1968) 『目の不自由な人々の読書：点字と録音テープの図書館』 (日点文庫 No.4) 日本点字図書館
- (1975) 『盲人福祉に生きる：生きがい求めて40年』 (日点文庫 No.12) 日本点字図書館
- キャラミ・マースメ、川内清彦 (2011) 「昭和初期における日本点字図書館の事業継続要因として失明軍人の果たした役割」 障害科学研究 35、95-107
- 宮田信直 (2002) 「点字図書の出版」 日本ライトハウス21世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー：自立と社会参加を目指した歩みと展望』 教育出版
- 日本盲人図書館 (1944 a) 『点訳通信』 (第1報・7月30日)
- (1944 b) 『点訳通信』 (第2報・10月30日)
- (1944 c) 『点訳通信』 (第3報・11月30日)
- 日本点字図書館 (2010) 『点字とあゆんだ70年—日本点字図書館点訳奉仕活動の記録』 日本点字図書館
- 日本点字図書館50年史編集委員会編 (1994) 『日本点字図書館50年史』 日本点字図書館
- 日本ライトハウス21世紀研究会編 (2002) 『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー—自立と社会参加を目指し

た歩みと展望』教育出版

西脇智子 (2013) 「本間一夫没後 10 年の節目に：本間一夫と日本点字図書館の啓発活動の進展を願う」『について
んフォーラム』88、4-7

大橋寛政 (1998) 『あめにたから：盲人牧師大橋五男の生涯』大空社

斉藤恒子 (1965) 『わが国における点字図書館の歴史—日本点字図書館を中心として』日本点字図書館

世界盲人百科事典編集委員会編 (1972) 『世界盲人百科事典』日本ライトハウス

視覚障害者支援総合センター編 (2009) 『ルイ・ブライユ生誕 200 年記念作品集／点字エクササイズ 63』視覚障
害者支援総合センター

立花明彦 (2010) 「図書館の黎明期における点訳奉仕運動」、日本点字図書館編『点字とあゆんだ 70 年—日本点
字図書館点訳奉仕活動の記録』日本点字図書館

谷合 侑 (1998) 『盲人福祉事業の歴史』明石書店

—— (1994) 「本間一夫と日本点字図書館」日本点字図書館 50 年史編集委員会編『日本点字図書館 50 年史』日
本点字図書館

Thomas and Edith Kelly、原田 勝・常盤 繁 訳 (1983) 『イギリスの公共図書館』東京大学出版会

梅澤幸平 (2009) 「ヴォーリズと近江兄弟社図書館」『大倉山論集』55、2009. 3、179-203

渡辺 勲 (1982) 「日本における図書館の障害者サービス年表」河村 宏編『図書館と国際障害者年—情報への
アクセスの平等を求めて (非売品)』日本図書館協会

